平成25年（2013）11月15日発行

再発見！菟原住吉、昔を未来へ
住吉歴史資料館

第７号

住吉歴史資料館だより

資料館だより
第7号目次

住吉のまちかど…1ページ
空区庚申塚（こうしんづか）

尚歯会100回を祝う
一般財団法人住吉学園理事長
住吉歴史資料館館長
中島愼賀……2ページ

渦が森小学校
竹本夏梨さん、おめでとう
住吉歴史資料館事業推進委員会
……3ページ

空区の涙だんじり
住吉歴史資料館事業推進委員
内田雅夫……4～6ページ

住吉の有馬道について
住吉歴史資料館事業推進委員
前田康三……7～8ページ

住吉村誌を読む
住吉村の聖地赤塚山
神戸大学地域連携センター研究員
住吉歴史資料館専門委員
木村修二……9～11ページ

住吉のまちかど

住吉の空区と山田区の境にある庚申塚（こうしんづか）です。住吉の古い家である横田五兵衛家が自家の系図を埋め先祖を敬う孝信塚（こうしんづか）として建設したとか、いや、むかしからの古墳だとか言われています。

北側を通る東西の道はとても古い道らしく、むかしより白い石で舗装されていたという話があります。西国街道よりも古いと言う人もいます。

昭和35年迄のだんじり祭では、5月12日の宵宮に宮入りするために御旅所に下るとき、空区のだんじりが、山田のだんじりをここまで迎えに来て一緒にお旅の浜にくだりました。集合時刻は午後1時30分ごろでした。おおきな空区のだんじりが庚申塚の北の道（右側の道）を香雪美術館のほうから綱にひかれて上がって来ます。山田のだんじりは有馬道の阪急踏切の下、この付近でそれを待ちました。ちょうど、この塚のところで出合うのです。

住吉歴史資料館ご案内

再発見！菟原住吉、昔を未来へ　がコピーです。

開館の目的は、「住吉に住む人々が郷土を理解し、それを子供達に伝え、子供達も郷土に誇りを持ち、ずっと住み続けたいと思うような町にしたい。住吉歴史資料館は文化・歴史的の面からそれをお手伝いする。」ことです。

そのため、以下を行います。

1. 本住吉神社横田宮司家に伝わる古文書の整理。
   関係文書、記念物、言い伝えの収集。
2. 展示物のメンテ。
   展示室、座敷を使用しての各種展示の企画。
3. やさしい、楽しいイベントを企画して
   みんなの地域への理解を深める。
4. 「住吉歴史資料館だより」を通しての広報。
   成果の発表。

●住吉歴史資料館の刊行物●

1. 本住吉神社詳誌　平成22年5月刊
2. 菟原だんじり本　平成13年刊　在庫なし
3. 住吉歴史年表　平成19年刊
4. 住吉歴史資料館だより創刊号　在庫なし
5. 住吉歴史資料館だより第2号
6. 住吉歴史資料館だより第3号　在庫なし
7. 住吉歴史資料館だより第4号
8. 住吉歴史資料館だより第5号
9. 住吉歴史資料館だより第6号
10. 住吉歴史資料館だより第7号
11. 住吉歴史資料館だより臨時増刊
    住吉谷の水車展
    （平成22年秋イベントの冊子資料）

お願い

広くみなさまからの情報、資料のご提供をお願い致します。

1．各町協議会の古い記録類、書類。旧青年団、警防団の旗 など。
2．各お家に伝わる古い書類、絵図、古文書 など。
3．各お家に残っている、農耕具、或いは、馬や牛が牽引する荷車（いわゆる“馬力”）の道具類などの労働具。
4．古い写真（近所、町内、住吉村、武庫郡、神戸 など）、小学校の卒業アルバム、卒業証書。
5．災害時の記録や写真。（阪神大水害、阪神大震災、昭和42年水害 など）
6．戦時中ののぼり、腕章、たすき、或いはバッジ、記念品など。
7．だんじり、住吉祭の写真。（渡御、宮入、宮出し など）

これは一例です。どんなものでも捨てる前に資料館に相談して下さい。貴重な発見があるかも知れません。寄託（資料館でお預かりする）、寄贈（資料館に頂く）等、適切な処置を行います。文化財であるとともに個人情報としても適切に取り扱います。

また、長年住吉に住んでおられる方々に気軽にむかし話をしていただいております。“ああ、あの人なら、住吉のこと“よお知ってはる”、という方をご紹介下さい。

編集後記

第７号では専門委員木村先生に「住吉村の聖地・赤塚山」を執筆頂きました。
住吉村誌の記事のなかから住吉の特徴をわかりやすくして住吉のみなさんにお伝えするシリーズの４回目です。

平成25年は住吉にとっていろんな方面で成果があがった年になりそうです。まず、尚歯会100回のめでたい年であること、それに加えて、空区に保存されている古文書が見つかりました。空区の今のだんじりの製作のいきさつが明らかになって来ました。いままでは言い伝えや聞き取りだけで想像していたものが実際の資料としてほぼ確認されたことになります。さらに、渦森台小学校５年生の竹本さんの夏休み社会科作品展での「住吉川の水車について」が来年初め、東京での全国児童生徒地図優秀作品展に出展されることになりました。住吉歴史資料館は住吉の皆さんのいろんな活動をバックアップできるように努めてまいります。

（M.U.記）

■資料館の開館日は毎週木曜日の午前中です。
　また、別途、日曜日は展示室を開館しています。（世話人会の委員の方がお世話）
■資料館の座敷ではお茶会が「菟原茶華道会」主宰で開催されます。

住吉歴史資料館　本住吉神社内御本殿西　〒658-0053 神戸市東灘区住吉宮町7丁目1-2　fax専用078-201-3738　メールアドレス shiryoukan@iris.eonet.ne.jp

尚歯会一〇〇回を祝う

一般財団法人住吉学園理事長
住吉歴史資料館館長
中島慎賀

平成二十五年九月十八日は尚歯会一〇〇回記念として、会場をポートアイランドホールに移し、交通の便の確保のため、大型バス六〇台を手配し住吉各地から、お年寄りを送迎しました。

神戸市の矢田市長が御祝にかけつけて頂き、住吉村から引き続く素晴らしい敬老の行事を住吉学園が引き継いでおられることに敬意を表し、会場の方々へ長寿を御祝するとのおことばを頂きました。

おまちかねの演芸にはいり、漫才の横山たかし・ひろしさんにつづき、スペシャルゲストに人気歌手石川さゆりさん、八代亜紀さんには、それぞれ八曲の計十六曲のヒット曲を休みなく熱唱して頂きました。長年にわたり第一線で活躍されている歌手であり、お年寄りを元気にするオーラが輝く素晴らしい歌声でした。

ご挨拶する中島理事長

また、地元の住吉中学校・住吉小学校の生徒児童さんによる演奏・合唱は毎年の全国コンクールレベルであり、お年寄りたちはお孫さんを見るようなやさしいまなざしで聞き入っておられました。

最後は、全出演者による合唱「ふるさと」で最高潮を迎えました。

司会の浜村淳、馬場尚子さんの軽妙な語りにより、あっと言う間の時間でした。

第一〇〇回の今年は七〇歳以上の方々が約八千三百名。一〇〇歳以上の方が十六名です。会場には約三千三百名の方が来られました。

住吉学園が住吉村より引き継いだ昭和二十五年当時の三百七十名から比べると長寿世界一というのもわかります。

「一〇〇歳笑顔の行進」としてステージには一〇〇歳のかたが二名上がられ祝福を受けられました。山田区の本郷さんと住之江区の下井田さんでした。

尚歯会は、明治四十四年（一九一一）一〇月、教育勅語発布二十周年の記念事業として住吉小学校児童並びに、一般の住吉村民が老人を尊敬する気持ちを養いましょうとの目的で創立したもので、その第一回を明治四十四年十二月二十三日、住吉尋常高等小学校講堂で開催し、七〇歳以上の高齢者を招待し一日の慰安をしてあげました。

住吉尚歯会一〇三年の歴史のなかで、第二次世界大戦の激化と阪神淡路大震災の発生で三回中止されたのみです。従い本年が一〇〇回目となるわけです。

尚歯（しょうし）とは、「よわい（齢、年齢）をとうとぶ（尚ぶ）」つまり、年をとられた方を尊敬するという中国の古典にちなみます。

明治から大正にかけては、七〇歳以上の人たちは八〇名～一〇〇名であったといいます。毎年五月の上旬に開催されていました。

住吉では、「尚歯会まであと何年？」「せめて、尚歯会までは生きなアカン」と日常の挨拶がかわされています。出演するプロの芸人さんたちも、持ち時間を超えてお年寄りの喜ぶような芸を披露しますから、尚歯会当日の住吉小学校講堂は笑い声と笑顔に包まれていました。

住吉小学校・中学校の合同演奏

全国的に見ても住吉のように連綿と続く敬老行事は珍しく、住吉町民の心を形にしつつ、住吉学園の存続する限り、二〇〇回、三〇〇回と続けて行くことを願っています。

竹本夏梨（かりん）さん、おめでとう

―「住吉川の水車について」が神戸市入選、全国作品展に出品へ―

神戸市の夏休み社会科作品展に渦が森小学校五年の竹本夏梨（たけもと・かりん）さんの作品「住吉川の水車について」が入選し、平成二十六年一月から二月にかけて東京で開催される全国児童生徒地図優秀作品展に出品されます。

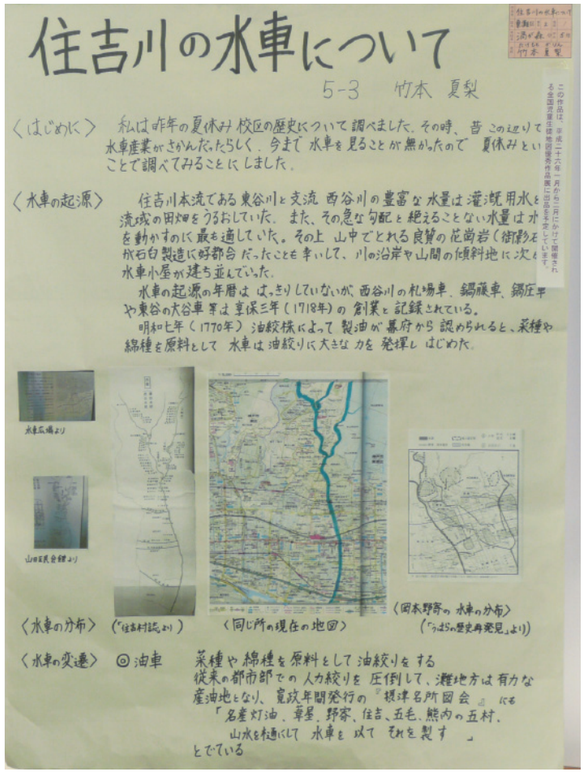
竹本さんは明治から大正時代にかけて八十あまりあった水車工場とその工場で使用された石臼一万個について調べました。製粉では灯油、そうめん、香料、線香を作り、製粉の後、行われた精米では、灘の生一本で有名なお酒になるお米をついていたことを調べました。

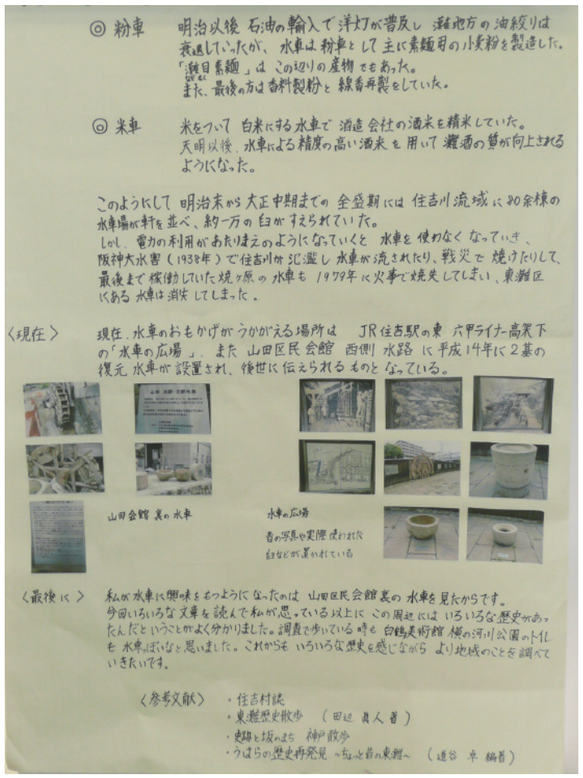
参考にした書物は、「住吉村誌」、「東灘歴史散歩」（田辺真人著）、「史跡と坂のまち　神戸散歩」、そして「うはらの歴史再発見～ちょっと昔の東灘～」（道谷卓編著）です。

むずかしい書物もあり夏休みよく頑張ったことがわかります。

昔の地図と現代の地図を比較し、水車の場所や分布をわかりやすく説明したところが、優秀作品に選ばれた理由です。全国展でも入選するといいですね。

住吉歴史資料館では、東京での作品展の後、「住吉川の水車について」を展示して住吉の人たちに見てもらおうと考えています。





竹本さんの作品「住吉川の水車について」

空区の涙だんじり

住吉歴史資料館事業推進委員　内田雅夫

明治二十年代の製作が資料で確認できる大発見

本年二月二十一日、住吉学園中島理事長が資料館に空地区古文書三点を持参されました。住吉空区のだんじりは明治二十年頃に作成されたといわれており、今回の古文書が発見されたことで、これが確認されたということになります。

今回はこれらの空区古文書につきご報告致します。

古文書は、次の三点で、「明治二十四年八月付空之町世話方」が作成した、地車修理費用割り当て管理台帳一号、二号並びに四号です。

① 地車修繕経費等級割帳
② 地車修繕費等級別人名帳第弐号
③ 地車修繕費等級別人名帳第四号

これらから、以下のことが分かり、空区のだんじり製作の経緯がわかる糸口となりました。

イ）明治二十四年八月の地車の修理に際して修繕費用を各家（のべ六十九名）に割り当て分割払いとし世話人が管理していた。合計百八十四円五十四銭。

この内訳は、以下となっています。

①地車修繕経費等級割帳では三十一名で合計八十四円九十四銭。割当額四円が十六名、一円五十銭が十三名、七十二銭が二名。

②地車修繕費等級別人名帳第弐号では十八名で合計六十三円九十七銭。割当額四円四十四銭が四名、三円八十九銭が四名、三円三十四銭が五名、二円七十九銭が五名。

③地車修繕費等級別人名帳第四号、二十名で合計三十五円六十銭。割当額一円八十銭が十九名。一円四十銭が一名。

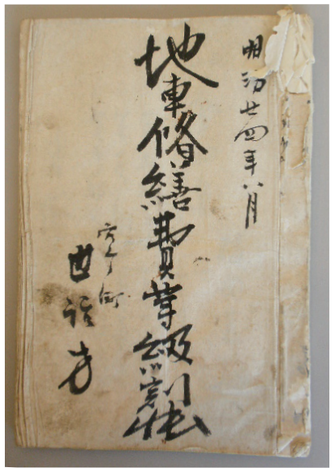
ロ）帳面の第三号が欠落し、五号以降の存在が不明であるので費用総額はわからない。

ハ）①と③では人名が重複しており、実数では五十四名。

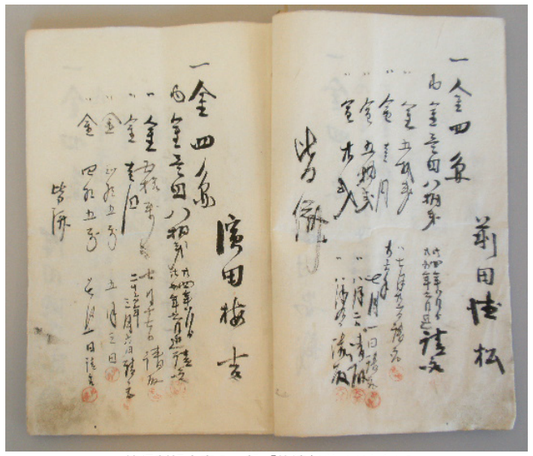
ニ）また、①では女性名で四名が寄附している。

ホ）分割払いで世話人はいちいち収納確認をおこなっており、完納の人には、「皆済」と注記ある。途中で支払いが途切れている人も多い。

ヘ）空区に在住しておられる方々のご先祖の方と思われる名字をお持ちの人たちが寄附をしておられる。



地車修繕費等級割帳


等級割帳内容の一部。「皆済」がわかりますか?

宮司さんによる昭和四十六年（1971年）の聞き取り調査

尚、空区のだんじりの製作年代については、昭和四十六年中に、本住吉神社横田宮司が明治生まれの六名の方々から聞き取られ、その中に空区の中西房吉さん（明治三十一年生れ）がおられ以下のように語っておられます。

『空のだんじりは明治二十年頃に造られたもので、当時人々はこのだんじりを「涙だんじり」と言っていた。その頃は（空区は）家の数にして三十五、六軒しかなかったので涙を流す思いで自分たちのもうけたお金を出し合ってひまに任せて地元でこつこつと造ったのでそのように呼んで大切にしたものである。

だんじり倉は今の会館の東側にあったが、日露戦争の後、近所に火事があったので、くぬぎ林（庚申塚の南あたり、牛神＝大日女神社があった）へ避難させたことがある。

昔はお宮の境内にある力石を持ち上げて力を競い合ったほどで皆若い人は力自慢でしたから、沢山の人数でなくても、あの大きなだんじりを上手に曳いたものです。』

大澤邸のあった山手幹線「室ノ内」交差点。もとの山手交番の下。

空区大澤邸1969年頃。もとの住吉山手交番のあたり（個人蔵）。

今のだんじりと断定　女性も自分の名前で寄附を

この聞き取り内容は平成二年（1990年）の大祭の直会（なおらい）が本住吉神社社務所で行われたときに宮司さんから紹介されました。今回発見された三点の古文書と、中西房吉さんへの聞き取りを総合すると、明治二十四年（1891年）には空区がだんじりを所有しており、おそらく今引いているだんじりであろうと思われます。

驚きは、女性四名が堂々と女性の名前で修理のための寄附をされています。当時、男性中心の社会であったはずですが、特に女性が低くみられるということでもなかったのかと思われます。また、七十二銭という寄附をされている方がおられ、もし、六回払いとしたら一回五銭の払いとなります。恐らく、五銭でもこの方に取っては負担は重く、涙だんじりと呼ばれた理由がよくわかります。

だんじりを組み立てた場所

一方、「だんじり本兎原住吉」（平成十二年刊）記載の、「空区のだんじりは明治二十二年ごろ淡路の大工に大澤邸（旧住吉山手交番あたり）の庭で組み立てさせた」との記述があります。また、「涙だんじりと呼ばれ、数年にわたる分割払いで購入した」との記載もあります。これも聞き取り内容と基本的に矛盾しません。

大澤さんは空区の旧家であり本住吉神社表参道の東側の一番北、「車屋藤九郎　弘化戊申歳」（1848年）で大燈籠を寄附されておられます。住吉谷の水車を使用した精米か精油業を経営されていた大澤藤九郎さんと思われます。車とは、水車のことです。

大澤家の屋敷の写真を掲載しています。豪壮な家で南側に門がありました。この中の庭で組み立てたのでしょうか。

空区有馬道現況

空区有馬道1969年頃（個人蔵）。右の家の前に北向きに停車しただんじりの写真が次のページ。

涙だんじりのほんとうの意味

さて、たしかに、家数五十軒そこそこではだんじり製作は相当な負担であったことが今回発見の文書からも裏付けられます。「涙だんじり」の言い方は、涙を流すほど苦しいなか手に入れただんじりへの思いを後世の私たちになんとか伝えたい当時の人々の訴えなのです。

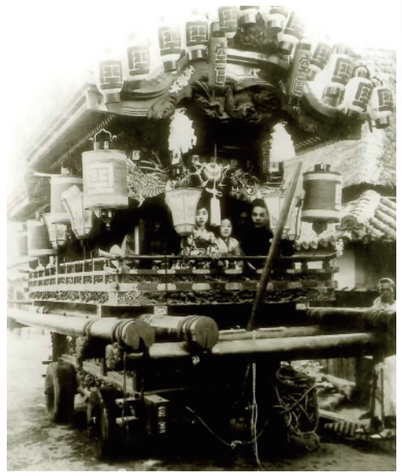
天保六年の楽車と同一のものか、それとも新調したものか

空区には、これらの文書の他に、天保六年の「空之町世話方」がまとめた、「樂車一條勘定録」が残っており、これは天保六年（1835年）の樂車引き出しの費用、並びに、修理記録です。内容を見ると、「樂車」は今のだんじりと同じと見て差支えないかと思われます。百七十八年前にはもう同じだんじりが引かれていたことになります。

明治二十四年（1891年）に修理しただんじりが五十六年前の天保六年（1835年）に引き出した「樂車」と同一かどうかはわかりませんが、資料などから推定すると、天保六年の樂車が五十五年後の明治二十年ごろには傷んでしまい、思いきって新調したのかもしれません。

有馬道セブンイレブンの前を北から。
左側の家が前ページの右側の家。

空区会館の南現況


有馬道空区会館のすぐ南で。東神戸病院の前あたりから撮影。

尚、これら三件の文書は、「空区有文書」として資料館で大切に管理致します。

古写真二枚　有馬道で引かれる空区の大きなだんじり

また、ここに掲載されている空区のだんじりの古い写真は、恐らく、五月十二日の宮入り後、十三日に宮出しし渡御行列について御旅所まで下ったあと、有馬道を上がって空区に戻って来たときのものだと思われます。それぞれ別の年に撮影されたものです。

一枚は、今のセブンイレブンの前、もう一枚は会館の下です。

会館の下での写真では、若仲衆はだれもおらず恐らく会館で直会（うちあげかい）をしていたのではないかと思われます。昭和十年九月に空区会館が落成しだんじり倉庫も備えつけてありました。住吉村誌によると、「会館が出来るまでは区会所前の民家で寄り合いをしていた」とあり、この写真では道が舗装されてないところから、まだ会館が出来る前のころの写真かと思われます。そうすると、大正末のだんじりの引き出し復活のころ、即ち大正十四年（1925年）頃かと推定します。

「空区有文書」三点、そしてだんじり古写真二点、ならびに資料館に寄託されている空区有馬道の古写真が数点があることにより空区のむかしの様子もだいぶわかるようになってきました。

表鳥居前で
平成5年頃

住吉の有馬道について

資料館事業推進委員　前田　康三

住吉の「有馬道」は空区から山田区へ抜ける道で「有馬道商店街」として親しまれています。この道は住吉を南北に横断する主要幹線であり、大正九年四月一日に県道第三十一号線として認定され住吉を起点として有馬温泉に達する道でした。

有馬温泉は関西の奥座敷とも称され、江戸時代の温泉番付では当時の最高位に格付されて、『日本三古泉』＝有馬・道後・白浜温泉、あるいは『日本三名泉』＝有馬・草津、下呂温泉といわれ、日本を代表する温泉でありました。

有馬温泉に通じる道は、いろいろあり、一番目には、北東より篠山街道の生瀬（西宮）より入る道があります。二番目には、西の神戸奥平野から小部峠を登り、谷上や唐櫃（からと）を経由して入る道がありました。

更に、三番目には、大阪湾でとれた新鮮な魚介類を運んだ『魚屋道・ととやみち』がありました。この道は江戸時代から使われた六甲越えの有馬への道で、深江・魚崎浜で取れたさかなを本山―風吹岩―東お多福山―雨ヶ峠―本庄橋―七曲り―六甲最高峰東―射場山腹―虫地獄・鳥地獄をへて有馬温泉に通じていました。

右有馬道の道標昭和13年水害で流され70年ぶりに発見された。
「右有馬道」と彫られている。

有馬道の繁栄―住吉駅の開設が明治七年六月一日

ここで住吉駅のお話です。有馬道を語るには住吉駅の開設がとても重要ですのでここで住吉駅ならびに当時の鉄道について説明します。

明治政府は鉄道院という役所を新設し文明開化の最先端事業として鉄道網を整備することに着手しました。

ＪＲ線は当時は「院線（いんせん）」と呼ばれ、東海道院線は明治三年八月より阪神間線路の測定を始めて四年後の明治七年（1874年）五月十一日に工事が落成しました。英国人技師のグルーなどが芦屋川、住吉川、そして石屋川の天井川に驚き、川の下にトンネルを掘って鉄道を通しました。当初の駅は大阪・西宮・三ノ宮・神戸停車場の四か所でした。当時の鉄道建設状況は、第一号が明治五年十月五日に新橋―横浜間が開通しており、阪神間の鉄道は第二号の重要プロジェクトでした。国際港神戸を大阪、京都と結ぶ戦略的な鉄道でした。

住吉駅は開通後二十日の明治七年六月一日に神崎駅（今の尼崎駅）とともに設置され営業を開始しました。今年で、百三十九年になります。

住吉駅の設置場所はできるだけ集落を避け本住吉神社の東に駅を定めました。灘の酒造家が「酒が濁（にご）る」と反対したのです。住吉村は集落の真ん中を提供し、先祖伝来の土地を涙を飲んで立ち退いたという話もあります。そんな犠牲の上に住吉は発展の基礎を獲得したのです。大きな時代を見る先見の明でした。

鉄道名称は、初めの院線『逓信省鉄道院に所属』から省線（しょうせん）『鉄道省に所属』、そして国鉄『日本国有鉄道』となり、現在のＪＲ西日本となっています。

久原房之助（くはらふさのすけ）氏は商工大臣を努め、今のオーキットコート全体が彼の大邸宅でした。住吉川に橋を架け駅から住吉川東岸の邸宅まで馬車で通ったと言います。その橋は現在も久原橋と呼ばれています。

明治中期ごろの有馬道を歩いてみます

さて、前置きが長くなりましたが、これより有馬道を歩いて見たいと思います。

西国街道の本住吉神社東にある有馬道石碑より出発し、六甲山に向かって北上しますとこの道は牛車及び馬車が頻繁に往来しており住吉駅附近から車が増加し、十分ほどすると「右モ左モ有馬道」の石碑があり、極楽橋（ごくらくばし）という橋がかかっていました。住吉村小墓という墓地があり、お地蔵様六体が橋のたもとで迎えてくれました。

右モ左モ有馬道道標

西国街道の記念石碑（神社前）

西国街道（国道2号線神社前）
にたつ有馬道の道標

もうこの辺から上は住吉村の聖地で極楽なのです。左の道に進むと小林墓地が見えてきます。これは住吉村大墓と呼ばれる古い墓地です。尾根筋の道はけっこうきつく、さらに進むと山田区の柿の木地蔵が見えてきます。この周辺には水車小屋があり日々コトン・コトン水車の稼動している音が聞こえてきます。又、用水路が張り巡らされ水車も利用していました。ほどなく、住吉川が見えてきます。

住吉川西岸を少し歩き落合橋を渡ると西谷川と分岐し、住吉川の東谷に入ります。川の左右に水車小屋が点在する水車小屋を見ながら北上すると七輛場の水車小屋群が現れます、ここが現在の甲南斎場です。

七輛場を通過すると四輛場を通って東谷橋に到着し、東側を進むと五輛場（本山側）、西側を進むと八輛場（住吉側）で、これを通過して山道に入ります。

これよりいよいよ、有馬に向けて急な山道を登っていきます。二十分ほど歩くと五助橋（現在の五助ダム附近）に到着します。

五助橋（ダム）

山道

これより住吉川本流の川沿いを本山地区に入り登るのです。登山道には石の道標等が設置しており通行者が迷わないようにしてあります。

五助橋より一時間ほどで本庄橋に到着すると魚屋道と合流して有馬へ向かいます。

本庄橋

かごで有馬越えをして大阪のだんなさん方は有馬へ湯治に行くのですが、かごは二人がき、三人がきと急行と普通のようなランクがありました。三人のときは一人は横を歩き、誰かが疲れると交替するのでした。山道のため、かごは横にかいて登るため、大阪湾から和泉山脈、奈良、二上山、阪神間の平野が一望でき、すばらしい眺めであったといわれます。

「有馬温泉誌』によると、「路は停車場より北西の方、山間に向ひ渓流に沿って進めば次第に上る。此間渓水の両岸絶壁にして奇石恠厳並び峙ち眺めおもしろし。七輛場・森安・三条谷と

一軒茶屋

六甲最高峰

て各茶屋あり」と優雅な山越えの温泉旅行風景を描いています。

多くの旅人の中には、明治二十三年にここを通った幸田露伴もおり、同じような感想を書いた文を残しています。

明治二十年代の住吉駅は有馬への表玄関だったのです。

山駕籠が主要な山越えの手段

阪神間に鉄道が開通すると、まず汽車見物に出掛け、六甲越えで有馬温泉への入湯がパックのツアーのようになり、客が阪神間のみならず全国から来るようになりました。

そして、それらの入湯客の多くが山駕籠を利用しました。

住吉駅前には山駕籠の帳場が二軒（藤村・竹庄）があり、盛時には山駕籠が百数十挺もあったそうです。そして、常人夫や人足が三十～四十人も山駕籠待をしていました。

忙しいときには臨時の人足を入れて用を足す事もありました。駕籠屋は一挺を普通二人でかつぎ、大きい人は三・四人を要し、山路三里を三～四時間で往った様です。しかし駕籠は、終点の有馬まで通して行く事は少なく、頂上や継場で交代して引返す事が多かったとあります。山駕籠一挺の料金は、時代により多少相違はあるが一円六十銭位でした。さて、一万六千円程度でしょうか。

駕籠屋さんは一人につき十銭を帳場に納めました。有馬道は道中には、七輛場・三條・喜右衛門等の茶店がありました。

やまかごのイメージ

ごろたのイメージ（「灘の四季」より）

さすがの繁栄も、明治三十年ごろに阪鶴鉄道（福知山線）が開通すると有馬へはこちらの方が便利になり、住吉村の有馬道からの入湯客は下火になってしまいました。

《『住吉村誌』を読む》 住吉村の聖地・赤塚山

神戸大学地域連携センター研究員・住吉歴史資料館専門委員　木村　修二

■信仰の聖地

『住吉村誌』の第十五編「名所旧跡」の第四章は「信仰の浄域としての赤塚山及其附近」と題されて、次のように書き出されています（読みやすくするため一部を改めています）。

六甲の連峰を縫う住吉川の清流、いわゆる山紫水明のわが赤塚山およびその背山一帯の静境は、村人の禊の場所としてふさわしく神仏を奉祠し一帯に信仰の聖地たるの観があった。

つまり、住吉川の上流部一帯にひろがる赤塚山をはじめとする山間部には、神や仏が数多くまつられ、住吉村の人にとって聖地ともいうべき場所だったというのです。

いうまでもなく赤塚山は、現在の白鶴美術館の西側に位置している山。麓から見たときには木々の生い茂った山にみえますが、いまでは山上部一帯がすっかり宅地開発されてしまっています。同じく村誌で「背山」と呼ばれている寒天山や荒神山、渦盛山、鴨子原、焼ケ原などと呼ばれたあたりも今では多くの住宅や団地がたちならぶ新興住宅地になっています。そんな赤塚山や「背山」一帯がかつては信仰の聖地だったというのですから、現在そこに住む人々はそれを信じることができるでしょうか。

しかし、そんな開発ラッシュにもかかわらず、比較的最近まで聖地の名残ともいうべき信仰施設がこのあたりには残されていました。

写真1. 行者堂（『住吉村誌』）

■行者堂

先にふれた『住吉村誌』の記述に続いて書かれているのは「行者堂」というお堂についてです（写真1）。この行者堂は赤塚山の山上部の東側にある神戸市バスの「赤塚山」バス停のすぐそばにわりあい最近まで建っていたそうですが、残念ながら取り壊されて今は宅地になっています。この行者堂がいつごろ赤塚山に建てられたかはさだかではありませんが、本尊が行者尊像で、不動明王像も祀られていたといいます。岩場の多い六甲山は古くから山岳信仰が盛んだったところで、いたるところに日本の行者の祖とされる役小角（役行者）にまつわる遺跡があり、赤塚山の行者堂もその一つにちがいありません。行者堂のかたわらには「行香院之碑」という石碑がありましたが、現在は神戸市水道局住吉浄水場の北側の一角（後述の妙見碑の移建先）に移転されています（写真2）。この碑には住吉村ともゆかりの深い中島を姓とする行香院という行者がこの地で役行者信仰を深め、安永四年（一七七五）に亡くなったことが刻まれています。『住吉村誌』には銘文の翻刻が掲載されています。この行香院碑銘文から少なくとも江戸時代の半ばにはすでにこの行者堂が建っていたことが推測できます。

写真2. 現在の行香院碑

■上人寺と徳本上人

この行者堂のほかにも、『住吉村誌』には、「愛宕山地蔵尊」、「妙見さん」、「上人寺」、「鼻高山の五輪塔」（『住吉歴史資料館だより』第4号参照）、「山の神」、「弓弦羽滝」が紹介されています。

このうち「上人寺」については、別に第三章「徳本上人の遺跡遺物」として、「赤塚庵」、「菩提樹と広葉杉」、「名号塔」、「座禅石」、「毘沙門天と霊泉」が詳しく紹介されています。

徳本上人とは、江戸時代後期の浄土宗の僧で、いわゆる念仏聖として各地に多くの信者を持っていました。

紀伊国（現和歌山県）日高郡の出身で、寛政一〇年（一七九八）に住吉村の吉田喜平次の招きで住吉に来村し、およそ三年にわたって教化につとめたそうです。

現在白鶴美術館の西どなりに徳本寺がありますが、ここは徳本上人の百回忌にあたって大正五年（一九一六）に建てられたものです。この徳本上人ゆかりの遺跡が赤塚山のあちこちに点在していたのです。徳本上人は、晩年江戸に行ってその地で亡くなりますが、生まれ故郷の紀州には徳本上人を記念した六字名号塔（「南無阿弥陀仏」の六字を刻んだ石塔）が数多く残されています（写真3）。なお赤塚山上にあった六字名号塔は、現在徳本寺に移建されています（写真4）。

写真3. 徳本塔（和歌山県串本町有田）

写真4. 現在の六字名号塔（徳本寺境内）

いまでも赤塚山内にあるのは「座禅石」です（住吉山手五丁目）。徳本上人は住吉滞在中、現在忠魂碑が建っている附近にあった庵室（赤塚庵）から毎朝この座禅石のところまでやってきて線香を二柱あげ、約三時間にわたって修行していたと『住吉村誌』に記載されています（九三九頁）。また幕末か明治の半ばごろ、ある人がこの石を加工して石材にしようとしたところ、のみをいれた所から赤い液体が噴出したためその人が卒倒してしまったというような祟り譚も伝えられています。本当に岩から血のような液体が出てきたとは思えませんが、こうしたタブー（禁忌）が存在することは自体、この石の霊性を物語っているとはいえるでしょう。おそらく、この座禅石は、赤塚山における神のよりましとしての磐座の一つだったのではないでしょうか。但し残念ながら、現在の「徳本上人座禅石」ないし「徳本上人座禅跡」と呼ばれている現地には、写真5にみえる上人の石像の下の座禅石そのものはありません。おそらく赤塚山が宅地開発された際に、石ごと移転することを断念し、大正時代に造られた石像だけが移転され、新たな台座と覆い屋が設けられたものと思われます。九尺（約二・七メートル）四方あったという巨石を移動させることは、現実的には困難だったでしょうが、やはり聖地赤塚山の根本的象徴だった可能性を思えば、石が失われたのは惜しんであまりあります。

写真5. 座禅石（『住吉村誌』）

写真6. 現在の妙見石塔

写真7. 山田の妙見道道標

■妙見さんと山の神

話を『住吉村誌』第四章に戻し、次に「妙見さん」ですが、これももと赤塚山の山内にあった妙見堂のことを主に指しています。この妙見堂は、戦前に赤塚山の地に兵庫師範学校が誘致、建設されるにあたって取り壊されたといいます。村誌によれば師範学校寄宿舎のあったあたりのたいへん眺望のいい場所に建っていたそうですが、撤去のあと寄宿舎のすぐ側に設けられた小公園の一角に「妙見碑」と呼ばれる石碑だけが現在も残されています（写真6）。かつては病気に悩む多くの人がこの妙見堂に参詣したといわれ、山田会館脇には妙見さんをさし示す石の道標が今でも建っています（写真7）。

一方「山の神」は、住吉川上流西谷と大月谷とが合流するあたりにある西谷公園内に奇妙な形をした石のほこら（写真8）があるのが、それともいわれています（近隣の個人が石祠の残骸などを集めて構築したとも）が、本来の山の神は、明治四〇年（一九〇七）に本住吉神社に合祀されており、現在も境内に鎮座しています。

写真8. 西谷公園の石祠

『本住吉神社誌』および『本住吉神社詳誌』によれば、明治四〇年の合祀以前、西谷の地に山の神があったときには、旧暦の一月六日に山の神の祭礼があり、村中の子供たちが手に手に幟をもって山の神に向かう「山入り」という行事があったそうです。

■愛宕山地蔵尊

移転こそされましたが、現存するものとしては、名号塔とともに徳本寺境内に移転された「愛宕山地蔵尊」があります（写真9）。『住吉村誌』には次のように書かれています。

写真9. 現在の愛宕山地蔵尊（火伏地蔵）

忠魂碑の後山腹にあり、忠魂碑建立までは、その山上にお祀りされていたもの。本尊は地蔵尊で京都の愛宕神社より勧請したものであるという。元来、愛宕神社は伊弉冉尊および火産霊尊の二柱の神を祭ったものであるが、この火産霊尊は火災をつかさどる神であるので、この地蔵尊は一名火伏の地蔵とて、村が火災の厄をまぬがれるようここにお祀りしてその加護をお祈りしたものである。これに対し毎夜油車中から交代でお灯明を献じたが、この灯火は遠く沖を通る船の目印となったということである。

なおこの火伏地蔵のご利益により、さる日露戦争の際この山田町より出征した兵士は、いずれも武運長久なることを得て一同無事凱旋することができたというので、明治三十九年その戦勝記念として祠穴にあった瓦葺のこの地蔵祠を立派な石造に改築している。

徳本寺境内の地蔵尊像の前に東灘区役所が建てた説明板がありますが、「この坂を少し登ったところにある地蔵尊…」とあることから、この説明板そのものはまだ山の上にこの地蔵尊があったころのものでしょう。説明板には「火伏地蔵」としていますが、『住吉村誌』のころはもっぱら愛宕山地蔵尊と呼ばれていたようです。村誌の記述によれば、現在忠魂碑が建っている広場は、もともと山の一角だったところを切り崩して平地にしたらしく、その崩した山の上に愛宕山地蔵尊があったということになります。その後忠魂碑建立にあたって背後（北）の山の中腹に移転され、さらに赤塚山の宅地開発とともに現在の徳本寺境内に移転されたということになりそうです。地蔵像を覆っている石の祠も恐らく明治三十九年（一九〇六）当時のものでしょうし、今となっては赤塚山の聖地性を示すたいへん貴重な遺物といえます。

写真10. 解体以前（1987年頃）の薬師堂（個人蔵）

＊

赤塚山が信仰の聖地だったことを知る人はほとんどいなくなりました。それは赤塚山そのものが宅地化され、山中に点在した宗教的施設や遺物が失われたことによります。赤塚山だけではありません。住吉では『住吉村誌』に書かれた多くの宗教的施設は、いつのまにか消えていったものが多くあります（写真10、小林墓地の一角にあった薬師堂）。もとより、そんなものは過去の因習に過ぎないという声もあるかもしれません。こんなことを書く私自身、信仰心が高いとはいえません。しかし、地域の人たちの素朴ともいえる信仰心によって守られてきた宗教的な施設や遺物が、地域の景観に与えてきた影響は決して少なくなかったと思っています。こう申し上げて、私たち住吉歴史資料館は、今の住吉の人々に宗教心や信仰心を持て、と主張しているのではありません。私たちの使命の一つは、資料を収集し、住吉のかつての景観を、展示や叙述などなんらかの方法で再現し、成果を地域に還元することだと考えています。

かつての赤塚山に関してご存じの方がおられましたら、当資料館まで情報をお寄せいただければ幸いです。